紹介

アンドレ・ジョリス著（瀬原義生監訳）

『地域からみたヨーロッパ中世
——中世ベルギーの都市・商業・心性——』

中世ベルギーといえば、一一世紀より毛織物工業を基盤として成長を遂げ、中世ヨーロッパの経済を強力にリードしてきたフランドル諸都市が有名であるが、ベルギーにはそれより以前から活発な活動を展開した都市が存在していた。それが、マーストリヒト、リエージュ、ウイ、ナミュール、ディナンといったムーズ川中流域の諸都市である。政治・経済・習慣・信仰の面で共通した特徴を持ち、独自の文化を育んできたこの領域に関する研究を切り開いてきたのが本書の著者、アンドレ・ジョリスである。

ジョリスの研究はムーズ地方の都市ウイの中世史を出発点とするが、彼の研究はウイという一都市の研究に止まらず多岐にわたっている。そうした彼の幅広い考察を知ることができるのが、翻訳書の底本となったジョリスの論文集 *Villes, affaires-mentalités: Autour du pays mosan* (Bruxelles, 1993) である。この原著には、ジョリスの主要な論文二六篇が「歴史一般及びウイ史」、「ムーズ地方の商業と交通」、「法と諸制度」、「心性」、「基礎科学」の五つの分野に分けて収録されている。選択基準は明らかにはされていないものの、そのうち九篇の論文がこのたび瀬原義生氏を中心とするグループによって訳出され、本書に収録されている。以下で、それぞれの論文について簡単に紹介しておきたい。

第一章「『都市』の概念」では、ウイという一都市の研究を通じてジョリスが鋭く問いかけることになった「中世都市」とは何かという問題に対する彼の展望が示されている。それによれば、都市は単一の指標では規定できず、その歴史は時間的空間的に限定されたひとつの枠内における都市現象として捉えられるべきものである。都市の発展と衰退は、各居住地が位置する地域全体が抱える多様な要素に規定されるということが述べられる。

第二章から四章にかけてはウイ史に関する論考である。第二章「紀元千年頃のスペインとロタリンギア—都市的自由の起源について—」および第三章「ムーズ地方における都市の自由と一〇六六年のウイの慣習法文書」では、慣習法文書の付与に関して詳細な検討が加えられる。ウイの文書において、都市の「自由」は領主権からの完全な解放を意味するものではないことが示されると共に、その概念の出現に対して同時代のスペインが影響を与えた可能性が検討されている。またウイ内部の社会状況に関しては、第四章「一一～一三世紀におけるウイの都市貴族に関する問題」において、都市貴族の起源とその動態の分析からフランドル、ブラーバント諸都市とは異なるウイの独自性が明らかにされる。

第五、六章ではムーズ地方の商業と交通が扱われる。第五章「中世ムーズ地方の都市と商業」では、一二世紀を境にムーズ川とブリュヌオー街道という二つの交通路の自然衰退によってムーズ地方の経済は停滞するという伝統的シェーマに対し、異論が唱えられる。人口動態の状況、耕作空間の拡大などを併せて検討することでムーズ地方の経済の展開が説明された上で、一四、

一五世紀になってもムーズ諸都市の商人が諸地域で活動を繰り広げていたことが、貨幣や流通税表等の検討から確認される。

第六章「一三世紀後半ナミュール伯領の大青圧搾機」は、ナミュール伯領の北東に多く存在した大青圧搾機の分析から、大青栽培、大青染料製造の発展を明らかにしたものである。毛織物の染料となる大青の栽培について、フランドル地方では史料中の言及が乏しく、その実態は十分に解明されてこなかった。ここでジョリスは教会十分の一税に関する史料の洗い出し作業を通じて、圧搾機の位置同定と総生産量の見積もりに成功している。

続く第七章「スタヴロのヴィバルドとローマ法」では、リエージュ近く、スタブロ地方出身の修道院長ヴィバルドに焦点が当てられ、中世の法的、行政的実践におけるローマ法の浸透の問題が扱われる。ヴィバルドが残した書簡の分析を通じ、ジョリスはローマ法がムーズ地方に生きた知識人の思考や行動に深く影響を与えていたと結論付けている。

第八、九章は、心性を扱った論文である。特に第八章「ブイヨンにおける聖ランベールの凱旋」は、一二世紀の記述史料から、当時の聖職者が彼を取り巻く戦士たちの世界をいかに認識していたかを探った注目すべき論考である。また最終章「唯一の愛それとも何人もの女性?」では、キリスト教が求める一夫一妻制の結婚形態が徐々に浸透していく一方で、社会の中には一夫多妻制ないし内縁関係の慣習が、形態を変えながらも一五世紀に至るまで維持され続けたことが、叙述史料の検討をもとに明らかにされている。

以上各論文は、ムーズ地方という枠で捉えられた社会の諸側面に検討を加えたものである。考察されている対象こそ中世ベルギー・ムーズ地方というわが国では馴染みのない領域ではあるが、本書はある地域の歴史を扱う際には人間の活動にかかわるあらゆる側面に光を当てることが重要であるということを伝えてくれる好著である。さらに本書は、心性へのアプローチなど従来の社会経済史研究に止まらない興味深いテーマをも含んでおり、訳者による簡明な日本語訳と適切な解説もあって、ベルギー史という枠を超えて読者の興味を引くものとなっている。一読をお勧めしたい。

（A5判　二五四頁　二〇〇四年一月　ミネルヴァ書房　四〇〇〇円）

（古井佐知子　京都大学大学院文学研究科修士課程）